

はじめに

吉田 恭子

精読の初心に返る？

本書はアメリカ文学研究と教育に大きな影響力をもってきた精読という制度を再検討することを目的に編纂された。二〇一三年から精読読書会として始まり、二〇一五年からは科研究費助成事業「一九世紀から二一世紀アメリカ文学に見る書く行為と読む行為の相互作用に関する研究」（課題番号 JPI15K02369）として継続してきた私たちの研究は当初「初心に返る」と呼ぶことさえ恥じらわれるほど素朴な問いから始まった。あらためて、精読とは何であろうか。そこには、真に精読という名にふさわしい読みに巡り逢うことはきわめて稀であるが、なんとかして自分たちもその「精読の境地」にたどり着きたいとい

う動機があった。

文学研究で精読が不可欠のスキルであり手順であることに反論はないだろう。あらゆるテキスト研究が精読の成果であることを自負している。「世界文学」研究の台頭で話題になった「遠読」ですら、一方で各国語文学の精緻な読みが基盤にあるという前提の上に成り立っている。ここには精読の氾濫と欠如という一見矛盾する文学研究の現実がある。

アメリカ文学における「精読」(close reading)はより慎重な扱いが必要だ。ゆつくり丁寧に詳しく無心に読むということでもなければ、読みの精度を上げる技巧や理論の習得でもなく、それが高度に政治的な読み方であることを今日私たちは知っているはずだからである。

日本におけるアメリカ文学の精読は、漢学的伝統に由来する訓詁学的な作業と、二〇世紀半ばの南部の文芸誌『フュージティヴ』や『ケニヨン・レビュー』由来の新批評的方法論との折衷的なアプローチを指すことが主流であろう¹⁾。これに加えて、六〇年代以降の脱構築主義的文学理論に導かれて、文芸テクストプロパーのみならずあらゆる現象にまで拡大されたテクストの森に分け入り、その精妙な差異を読み解きつつ森を横断する行為もまた精読であると、ジェーン・ギャロップをはじめとする近年の精読擁護者たちは主張するが、文学理論上の違いがあり相容れない点も多いからか、日本では文学理論の台頭で精読をないがしろにするようになったという見方が根強く、前者の組み合わせがもつぱら精読とされる傾向がある。両者の見解の違いからも明らかなのは、精読とは文学研究の基本という点で異論は生じないものの、普遍的・客観的・科学的分析手段ではなく、それがいったい「なにを・どのように・なんのために」読むのかという共通理解を欠いた、むしろ特定の思想・哲学を伴う極めて多様な実践の

ありようであり、視角であることである。

新批評的精読は対象テクストを歴史的・社会的文脈や作者の伝記から切り離し、それ自身で自律的な有機体とみなすことから、厳密かつ客観的な手法である印象を与えてきたし、また自らそう主張してきた。かかる手法で高く評価される作品は作者の名声によるのではなく、純粹にその形式的構造美の賜物であるという訳である。文学作品の生態研究ではなく解剖こそがその本質に迫りうるという教義は、外国文学としてアメリカ文学を読む者には都合がよい。その一方で、その作品を生み出した（原則的には匿名で入れ替え可能なはずの）作者は、作品がひとつの独立した美的世界をなす限り、絶対的な存在となる。新批評がジョン・クロウ・ランサム、アレン・テイト、クレアンス・ブルックスら南部のモダニズム詩人らを中心に展開したことを思い起こすまでもなく、新批評は書き手の背景を問わぬことでその権威を中和するように見せながら、テクスト創造主を神秘的に超越した存在へと変容させるのである。おそらく日本における脱構築的な精読への抵抗には、文学作品の作者の権威をめぐる葛藤がからんでいる。

新批評はまた戦後冷戦体制下において「審美的判断」を基準にモダニズム文学を再定義することで、イデオロギー的には多岐にわたった戦間期の実験的文学を「脱政治化」することに成功した。戦間期の革新的文学の歴史を傍流化したのである。その結果、南部農本主義を背景とした人文主義が正常化されるところにも、共産圏文学に対するアメリカ文学の自由という優位性の根拠となった。

そうしてセス・モグレンの言葉を借りると「苦痛ながらの黙認」(pained acquiescence) (Moglen II) を基調とする白人男性の忍従の文学がアメリカのモダニズム正典となり、新批評の「美学」は、モダニズ

ムを軸とした南北戦争前から第二次世界大戦後にかけてのアメリカ文学史の枠組みを形作るのに威力を発揮してきたのだが、そのような構造が意識されるようになったのは、冷戦終結後三〇年目にしてようやく近年文学史の時代区分の見直しが活発になり、モダニズムの地理的・階級的・人種的横断性と、時代的な縦の広がりにも光が当てられるようになってからであった。^② 日本における新批評的美学を受容も、日米安保体制下の冷戦的文化政治の文脈から再検証が進んでいる。^③

とはいえ、当時から新批評が標榜する客観的中立性は一部の批評家にとってあからさまに政治的な操作であることは言うまでもなかった。アーネスト・カイザーは「エリソンの小説および作者本人と作者についての社会芸芸批評の批判的検証」（一九七〇）において、新批評の農本主義的出自とその理論的主張が不可分であると明言し、新批評的評価に適う作品は「無感情、無関心、無関与」で「責任逃れの逃避」でしかないと厳しく批判する。

「ロバート・ベン・ウォレンとクレアンス・ブルックスと」その弟子は、社会的意識の高まりを見た一九三〇年代に「他の批評家らと」張り合い、一九四〇年代、第二次世界大戦後に、大学の文学部と芸誌の完全支配を達成し、今日もなお支配を続けている。詩や小説の構造的特徴について一行一行、一語一語を分析した緻密で難解で客観的「科学的」批評を書くことで、形式に心理学を従属させ、詩そのものがすべてであり目的であると見なし、作品の主題に関係なく、詩の形式とスタイルのなかに作品理解につながる知識が埋め込まれているとする。彼らは極端なまでの芸術のため

の芸術派なのである。……アディソン・ゲイル・ジュニアは「文化的ヘゲモニー——南部白人作家

とアメリカ文学」(一九七〇)で、これらの農本主義批評家、詩人、作家らを、南部貴族であり反民主主義的人種差別主義者と呼び、こう述べている。彼らにとつては「詩や小説は、精巧な壺のように、内的な規則に律せられた『自己目的的な構造物』であり、選ばれし少数者しか分析し解釈できない言語構造を規範としている。作家の役割はヘンリー・フィールディングが信じていたごとく教育目的ではなく、文化資本的エリートの審美眼を満足させる名人芸を生み出すことなのである。」

(Kaiser 57)

ラルフ・エリソンが新批評の基準に則った後期モダニスト的規範で評価されることは、多くの黒人批評家にとつてエリソンが人種・社会問題に直接コミットしようとしな^いことの証左であり、体制維持への協力と映つたのだ^らな^い。ゲイルが表明するフラストレーションは、新批評の「客観性」が限定されたものでしかなく、実はある種のテキストを権威づけするための仕掛けであると同時に、新批評がアメリカ文学史の長年にわたる人種分離セグレーションを支えてきたことをも暴き出す。人種によるアメリカ文学史の分離は、政治・行政上の分離が終焉を迎えた後も、ジェンダーによる分離とともに長らく規範であり続けた。それはごく最近までアメリカ文学史の教科書には黒人文学や女性文学といった項目立てが存在していたことが端的に物語っている。新批評的精読は、書き手の人種・エスニシティやジェンダーを考慮せず文学テキストが科学的に分析評価できるかのように謳う一方で、これらの文脈を無視してしまうと実りのある読みに達しえないテキストを精読に不向きなテキストとしてあらかじめ排除してしま^う。

このように特定のモダニズムテキストを「美学テキスト」として国民文学のヒエラルヒーの最上位に

位置づけることで、その規範に合致しないものが「政治テキスト」として周辺化される構造については、本書の出発点において、高野泰志「政治テキストと美学テキスト」が明瞭な議論を提供している。

本書の各章で分析の対象となる作家のほとんどは、二〇世紀半ば以降のアメリカ文学史観で正典作家の地位を確実なものとしている。本書の執筆に至るまでの研究会では、これらの正典テキストは芸術作品として、現実から独立して自律的な想像空間が精巧に構築されているがゆえに精読に耐えるのではなく、実は言語構築物としてテキスト外への言及に依存することで高文脈を維持するからこそ精読を誘うのであるという理解を得るに至った。すなわち、先行テキストへのたえまない言及こそが、すでに評価が定まった作品と肩を並べつつも自らを差異化し、その言及と差異がゆえに精読を誘い、美学テキストとしての自己定義を可能にするのである。具体的には高野論文で分析されている『日はまた昇る』の第二章、他には（本書では論じられていないが）ウィリアム・フォークナーとアーネスト・ヘミングウェイによるシャーウッド・アンドソンのスタイルやテキストのパロディ化、ナサニエル・ホーソーンのとくストをめぐるポーの批評などが研究会での検討の対象となった。これらの研究は正典テキストのオリジナリテイの根拠をあらためて問い直すとともに、剽窃やパロディ、パステイ・シュの問題が精読を誘導する仕掛けと密接に絡んでいることを指摘するのに役立つ。

また、間テキスト性の基本理論としては、ジュリア・クリステヴァの『セメイオチケー 記号の解体学』⁵が出发点となった。クリステヴァが想定する間テキスト性とは、いわゆるポストモダンなメタフィクションで小説の虚構性を前景化するからくりとして先行テキストを小説世界に侵入させるたぐいのインターテクスチュアリティではなく、例外なくすべての小説作品に見られる特性である。社会的・歴史

的文脈の中から生まれ、かつその中に小説を位置づける間テクスト的な機能としてのイデオロギー素が小説の重要な要素であり、テクストは諸テクストの置換であり、テクスト内には他のテクストから取られた複数の言表が交差するとクリステヴァは述べる。本書第一部「精読と間テクスト性」は小説が精読を誘う仕掛けとしての間テクスト性に着目する。高野泰志「政治テクストと美学テクスト」は、言葉の選択と並べ方に価値をおくテクストを「美学テクスト」、特定の機能を持ったテクストを「政治テクスト」とするとき、精読に値するのは「美学テクスト」とする価値観は、あくまでもモダニズム美学が生み出したものであり、精読に根ざした文学研究はモダニズムテクストの特権化であると指摘する。続いて中西佳世子「『手堅い現金』と『泡のごとき功名』——ホーソーンの創作と報酬」は美学テクストに最上の価値を置く職業作家にとっては永遠のジレンマである芸術と経済（収入・生活）の問題を扱う。ナサニエル・ホーソン自身が「痛々しいほどつまらない」と酷評する短編「ピーター・ゴールドスウェイトの宝」（二八三八）をあえて取り上げ、作品中における「カネ」をめぐる表現を、当時の作家の書簡、さらにはホーソンも支持者であったアンドリュー・ジャクソンの金本位制についての言説に接続することで、「美学テクスト」作家ホーソンにとって、「カネ」が世評以上に、孤独な作家の創作美学・創作行為の支えとなったことを、伝記上のみならず短編で援用されるレトリックの内に読み解く。島貫香代子「『ヴァビーナの香り』の追加——『征服されざる人々』における登場人物と作家の成長」はウィリアム・フォークナーが雑誌掲載の短編を組み合わせて長編へ発展させた『征服されざる人々』（二九三八）の創作上の工夫と配慮を伝記的事実、他のフォークナー作品、そして歴史的文脈に重ね合わせる。主人公が精神的な成長を遂げる書き下ろしの最終章「ヴァビーナの香り」の背景として、彼が再

建期後半にミシシッピ大学法学部に籍を置いたことに本論は着目し、一八七〇年代初頭のミシシッピ大学法学部の再編とその政治的背景を詳細に照合する。本研究会に招聘講師として参加した舌津智之は、精読とは間テクスト性を探り出し突き止める作業に他ならないと主張する。「抒情する叛逆者——『オン・ザ・ロード』と白い音楽」では、従来ジャズの即興的パフォーマンスの影響が指摘されてきたジャック・ケルアックの『オン・ザ・ロード』（二九五七）について、それを認めつつも、フランク・シナトラのスローなバラードや、「黒い」ジャズとは対極にあると見られがちな「白い」カントリー音楽など感傷的なポピュラーソングの影響を小説の中に読み取り、人種的他者を欲望しつつも白さへと回帰してゆく男たちの抑圧がはからずも生み出すポリフォニーを指摘する。

作家が描く読む行為

アメリカ文学研究における文学理論流行史をふり返れば、新批評は六〇年代に下火となり、フランス由来の脱構築理論に取って代わられたという言説があるが、事態はそれほど単純ではない。新批評は今日もなお高等教育の場で大きな影響力を持つ。ひとつには、それがアメリカの国民文学生産のサイクルで大きな役割を果たしているからであり、その関連において、精読技巧の教授法が教室内できわめて有効な枠組みかつ道具であり続けるからだ。外国文学研究の対象としてアメリカ文学に接する限り、その受容をもつばらの関心事とし、文学作品生産の側面は研究の埒外となりがちである。けれども文学作品生産、すなわち作家の執筆という観点からアメリカの英文科を見直すと、また違った様相が見えてく

る。

ブルックスとウォレン編纂の姉妹本『詩の理解』（初版一九三八）と『小説の理解』（初版一九四三）は、戦後アメリカの文学教育でもっとも影響力をもった教科書であった。一九四六年からアイオワ大学ワークショップに学んだフランナリー・オコナーは『小説の理解』初版を「私のバイブル」と呼び後進に勧め、一九五九年には、オコナー自身の短編「善人はなかなかいない」が第二版に収録されるに至る（McGurl 133-34）。

『小説の理解』は初版時には「小説の意図」「プロット」「登場人物」「テーマ」「特殊な問題」の五節に分かれ、それぞれ六〜八編の短編または抜粋が収録されており、各テキストの後には作品の細部に学習者の視線を導く短い解題に続き、さらなるディスカッションのきっかけとなる問いで締めくくられた解説が付されている。英米文学以外にヨーロッパ文学の翻訳も収録され、当時存命中の作家としては、ユードラ・ウェルティ、ジェイムズ・サーバー、アーネスト・ヘミングウェイ、ウィリアム・フォークナー、キャサリン・アン・ポーターなどの短編が収録された。現在も流通している一九七五年刊の第三版では、第五節「特殊な問題」に代わってヌーヴォー・ロマンやメタフィクションを扱う「新しい小説」、ウェルティ、ポーター、ウォレンがそれぞれ自作について語るエッセイを含む「小説と人間の経験」、そして解説のない追加付録「読書のための短編」というセクションが追加されている。最終セクションにはジョン・アップダイクやF・スコット・フィッツジェラルドに加えて、ジーン・トゥーマー、ラルフ・エリソン、ジェイムズ・ボールドウィンといった新批評的な戦後のモダニズム規範から逸脱しない黒人作家の短編も加えられており、初版出版以後変化する小説のモードと書き手の顔ぶれに対応しよう

とする編者の意図が窺える。

以下の短編は主に楽しんでもらうため、そしてほぼ無限に多様な短編小説のさらなる例を読者にお見せするためにある。けれどもそれを最大限に楽しむためには、たとえばテニスの試合や銀行経営や子育てのような人生のほとんどの事柄と同様に、小説の読書においても受け身でなく知的な積極性が楽しみを喚起するのだということを、読者は最初に理解しておく必要がある。

具体的には、できうる限り最大限に想像力を駆使して短編を解釈する一環として、できうる限り最大限の理解に到達するべく読者は努めるべきである。このどちらが欠けてもだめなのだ。自ら率先して問いかけ、真剣にそれに答えようと努めるべきである。そしてこれらの問いは意味のみならず、手法に関わるものであるべきだ。今まで見てきた通り、この両者は緊密に絡み合っている。あり、多くの場合は、短編小説という同一のものの両側面なのである。だがこれに加えて、登場人物と行動に関して想像的な感情を發揮する努力が必要だ。小説を読むとき、人は役割を——複数の役割を——演じているのである。(Brooks et al. 383)

右の引用はトゥーマーとエリソンの作品が冒頭を飾る最終セクション導入部の全文だが、「バトル・ロワイアル」を楽しむべしという指針もさることながら、読者はまさしく精読修行ともいうべき態度でテキストに臨むことを命ぜられ、また、その際に、「なにが」書かれているかばかりでなく、「どのように」書かれているか読み解くことを求められている。

『プログラム時代——戦後小説とクリエイティブ・ライティングの台頭』で、ヘンリー・ジェイムズから今日に至るまでのアメリカ小説の潮流を、いわゆるハイポストモダニズム、ミニマリズム、マイノリティ文学も含めて、長いモダニズムの一貫と主張し、文学史の見直しを促したマーク・マクガールは、新批評がモダニズムの「学校制度化」(institutionalization)に加担し、ひいては後続作家の育成教条となつた過程を記述する。

戦間期の文学的モダニズムのあり方と手法は戦後に新批評の教授法で体系化され修正された。以前の作家業では層の薄かった階層の学生にまで幅広く浸透したのだった。他の効果としては、モダニズムの制度化が教育制度と手を取りその社会的機能範囲を顕著に強化拡大したことが含まれる。以前は都市部の同人の産物として小文芸誌のごく小さな読者層に流通していたのが、今やモダニズムの伝統に属するテキストは重宝され、学習対象としてシラバスに載るようになったのだ。その文学的実践の正典は、技巧に対する自意識的注意の要請も含めて、全国津々浦々の創作科の教室で追究されるようになり、その末期的実践者は教授会の構成員になりお世話なのである。(McGurr 50-51)

教科書としての『小説の理解』は、小説の「具体的作品の詳細な分析かつ解釈的読み」の教授を目標とするだけでなく、「読み方を学ぶ者」は「書き方を学ぶ者」であることを明らかに意識しており、巻末の用語集はとりわけそのような学習者を対象としていた。一九世紀からの歴史的・書誌的アプローチを捨てた新批評は、ウォレンのような実践者兼批評家が戦後の文学研究の中心に「芸術家の視点」を

据え、作家の創作過程を「理解」し、さらには「模倣」するように促すのであった(13334)。新批評が北部の新人文主義と結託することで、アイオワ大学ワークショップをはじめとする創作科大学院を支えるテクスト理論であり続けるのも、書き手のエージェンシーを最大限に尊重するからであり、それがゆえに同じ英文科内において他の文学研究者らと対立することになる⁽⁶⁾。

マクガールが念頭に置いているのは戦後急速に発展した創作科の教授理論であるが、アメリカ文学において実作者による実作者のための小説読解の手法を示したのは、「長いモダンイズム」のスタート地点に立つヘンリー・ジェイムズに他ならなかった。「作者の performance に意識的であり、社会・政治的文脈や道徳ではなく芸術的な観点から作品を判断できる読者」がジェイムズの思い描く modern reader であった (Pearson 13)。けれども、ジェイムズやウォレンらの指導を待つまでもなく、作家は書き手であるより以前に読み手である。読んだ量が書いた量より少ない作家は原則的に存在しえない。第二部では小説に表象される読む行為の読解、すなわちメタリーディングを試みた。その導入となる竹井智子「読むことと書くこととヘンリー・ジェイムズの『過去の感覚』」は、作中で描かれる読む行為は読者の精読を促す装置となりうると指摘し、ジェイムズの未完の長編『過去の感覚』(一九一七)において、作家の読む行為と書く行為が相互補完的な螺旋円環として描かれていることに着目する。吉田恭子「宙吊りの生に宿るネガティブ・パワー——ベン・ラーナー『アトーチヤ駅を後にして』を散文詩として読む可能性」は、ラーナーの第一長編『アトーチヤ駅を後にして』(二〇一一)を小説としてだけではなく、ヴァーチャルな散文詩として読むことを試みる。そのような読みを促すのは、小説のちょうど中間地点で語り手が夜行列車内でジョン・アッシュベリーの詩を読む場面である。本研究会の連携研究者

である杉森雅美による「ある黒人の『文字通り』な抵抗——ジェシー・レドモン・フォーセットの『エミー』」は、いわゆる「政治テクスト」と分類されるであろう作品で、精読が果たすクリティカルな役割をあぶり出す。一般に洞察的な読みとは言外の含意や文脈的背景や隠喩的な二重の意味などを読み抜くことと捉えられがちだが、雑誌『危機』の文学担当編集者であったフォーセットの短編「エミー」(一九二二—三)は、字義的な読み、つまり明示の意味を直接受け入れることが逆説的に戦略的な読みになりうることを描き出す。最後に研究会に招聘講師として参加した森慎一郎による「The Nickel Was for the Movies ——フィッツジェラルド『ラスト・タイクーン』の一場面をめぐって」は、未完の長編、それもたった一場面を徹底的に精読する試みである。ハリウッドで脚本家として働く文芸作家がプロデューサーに映画の物語技巧の指南を受けるといふ場面は、フィッツジェラルド本人の惨めなハリウッド体験を映し出す一方で、作家としての冴えた手練をも見せつけてくれると指摘しつつ、けれども精読にさらされたテクストが最適な解釈に収まりきることはないとして、あえてきれいな解釈に収まりきれないはみ出した部分にも意識を向けてゆく。

教室の精読

本研究会では今日の教育における精読の役回りもくりかえし話題に上った。文学研究者は文学作品を時間をかけて読み考察し批評する営みの価値を疑わない。一方で、日本およびアメリカの大学で教育にも携わっている者として、人文学的価値観が経済至上主義に浸食され、大学に対する社会的要請の見直

しを誘導する動きがある今日、文学を大学で学ぶ価値を「布教」する必要性にかられている。その際焦点となるのは、文学研究者の養成ではなく、高度なりテラシーの習得、すなわちリベラルアーツ教育である。大学での読み書き教育において、文学作品はなぜ、どのように有効な教材となるのか。

議論のきつかけとなったのはエレイン・ショールウォーター著『文学を教える』*Teaching Literature* (二〇〇二)であった。本書はアメリカフェミニズム批評の重鎮ショールウォーター自らが初心に戻って、教室内でのさまざまな問題点や実践的な知恵を同僚の文学研究者らと分かち合う構成になっている。教育への情熱に満ちてきわめて実用的である一方で、外国語文学としてアメリカ文学を教える立場からすると彼我の感も抱いてしまう本だが、登場するすべての教育者にとって、精読の実践とそこから学生が得る洞察こそが大学の教室で文学を用いる理由であり、疑いなく共有される根本的な価値観であることが再確認できる。作家にとって読むことと書くことが螺旋を描くように、大学教員にとっては研究と教育とが螺旋を描くのだ。と同時に、ショールウォーターのような文学批評家がこのような本を世に問うに至った背景には、アメリカにおける文学研究が細分化し、英語の読み書き教育から乖離しているかのような印象を与え、大学生の英語教育にもはや英文科の学位取得者は必要ないという極論さえ聞かれるようになった厳しい現状もある。だとすれば、今日社会が想定する高度なりテラシーとはどのような能力なのだろうか。

インド工科大学教授で詩人・言語学者のルクミニ・バヤ・ナイルは、大量文^{イリテラシー}盲時代の到来を予言する。ここでいう「イリテラシー」は文字の読み書きができないことではなく、「高度なりテラシー」の欠如を指す。

つまるところ書く行為は、多少アメリカに似て、強力で支配的だがひやひやするほど若年なのである。技術としてのその新しき、そして権力との密接な結びつきの証拠として、基本的な識字力は世界人口の半分にもまだ達していないという事実が挙げられる。こういうわけで、識字力は平等に配分されるわけでもなければ、容易に獲得できるスキルでもないということは何度も強調しておきたい。……

読み方の慣習が変わるにつれ、人々の「口承性」「リテラシー」「創作行為」にたいする概念もそれに伴い変化することになるだろう。というのも、最新の技術発明をもつてすれば、利き手に書く道具を握るといった初期の書き手が要したもつとも基本的なスキルでさえ、今日では不要になったのだから。……もしかすると振り子はふたたび揺り戻して「大量文盲社会」とでもいえるものに近づきつつあるのかもしれないが、以前より学識に欠けた文化になるというわけではない。そこで根源的な問いが浮かぶのである。二一世紀において文学的創造性を常に書き言葉に結びつける必要があるのか？ (Nair, 9)

文字文化から新口承文化への振り子の揺り戻しという指摘は、ボブ・ディランのノーベル文学賞受賞を予感させるようだ。高度な情報伝達では文字通りの言質に加えて言外の情報が複雑に層をなしている。印刷技術が発達した近代以降は文字言語が微細で込み入った情報伝達の主役となり、言語表現と読解の技巧が洗練されてきた。だが今日、重層的な情報伝達の媒体が活字から映像に取って代わられたた

め、文字媒体は「文字通り」のことだけを伝える役割へと変化しつつあるという。たとえば「あさつて五時に三条京阪高山彦九郎像前で待ち合わせ」という具合に。そうして比喩や修辞表現、二重の意味や文脈に依存する言外の意図のような複雑なレトリックを書き言葉に読み取る意思と能力が文明全体で収縮していく。この現代的識字危機の波は学歴を問わず、エリート層をもさらっていく。インドの場合だと、基本的な識字率が近代的レベルに達する前に高度な識字力が低下するのだから、なおさら影響は大きい。この指摘は大学に勤める私にもあまりに腑に落ちた。私たちは読むことについて驚くほど無防備になった。肝心なことは文字通りそこにあるから見逃すものはなにもなくいつでも検索できる、というわけだ。

文字言語が最も高度な情報伝達手段の地位から降りることは、同時に文学が国民国家の威信を担う任務から解放されることでもある。近代的な教養主義は終焉を迎える。文字言語に重層的な意味を読み取る能力は特殊技能となりつつあるのだ。だとすれば、文学テキストを用いた精読教育は人文学的教養の涵養というより、特殊な高度技能養成教育の側面があるのかもしれない。

きわめて高い義務教育就学率と識字率を誇る日本においては、文字が読めることを当然視するあまりに、正確に読めているのか、本質的な意味を把握しているのか、さらには言語の重層的なメッセージを認識できているのか、改めて疑問視することがなかった。だからこそ新井紀子『AI vs. 教科書が読めない子どもたち』（二〇一八）の報告は驚きをもつて迎えられたのだろう。新井がディレクタを務める人工知能プロジェクトの調査によると、中高生の約半数が教科書の内容を正確に把握するだけの基礎的読解力を習得していない可能性があることがわかった。新井は、人工知能に代替されない人材に不可欠な

のは意味を理解する能力であると結論づけている。前述のナイールの指摘を併せて考えれば、そのような能力を獲得するのは今後一層困難になっていくのだ。全国の中高生を調査しその結果を分析した新井は「もしかすると、多読ではなくて、精読、深読に、なんらかのヒントがあるのかも。そんな予感めいたものを感じています」（新井二四六）ともらしている。

以上のような問題意識を共有した上で、本書では文学教育、精読と教育をめぐる議論から、あえて外国語習得の要素を外すことにした。読めない、意味がわからないという点においては、実は日本語も外国語も同じであるという前提を徹底するため、そして近年『教室の英文学』（二〇一七）などでくりかえし議論されてきた英文学教育の意義論・方法論とはまた別の側面から精読と教育の問題にアプローチするためである。

そこで第三部「精読と文学教育」にはフロリダ・ガルフコースト大学でアメリカ文学を教えている杉森雅美による「英文学専攻と精読指導——アメリカの高等教育」と、現代アメリカ文学と英語教育学の双方を研究対象としてきた伊藤聡子による理論的考察「パワーポイントのない風景——文学的な精読を考える」を収録する。杉森はアメリカでの学部生を対象とした実践の詳細を報告し、伊藤は教育学の「自省的な読み・学び」の観点から、文学作品精読の意識的言語化にメタ認知技術の教授可能性を見出す一方で、教育に携わる文学研究者に意識改革を促す。

美事な精読に接する瞬間は宗教的啓示ともいえる。あらかじめ目の前にあったはずの細部にはじめて気がついたことがきっかけとなって、テキスト全体どこか世界が違って見えるような感覚を経験した

ことで文学の研究に魅了されるようになった人は少なくないはずだ。精読がテキスト選別に働く可能性を意識しながらも精読の魅力を追求することで、精読をめぐる議論を喚起することを執筆者一同が期待している。

注

- (1) 日本におけるアメリカ文学の精読的伝統については、異「今、日本で、アメリカ文学にどう取り組むか?——学問と批評のインターフエイス」参照。また、そのような伝統を継承する近年の成果としては諏訪部による『マルタの鷹』精読の試みが挙げられる。新批評が果たした役回りについては越智『モダニズムの南部的瞬间——アメリカ南部詩人と冷戦』参照。
- (2) 近年の文学史の見直し、モダニズム再考については、McGuff' James' Mao and Walkowitz' Walkowitz' D'Arcy and Nilges' Hayot and Walkowitz' Douglas などを参照。
- (3) 越智「新批評、冷戦リベラリズム、南部文学と精読の誕生——トランスパシフィックな国語教育と川端康成」、金『日本文学の〈戦後〉と変奏される〈アメリカ〉——占領から文化冷戦の時代へ』などを参照。
- (4) このような問題は二〇一一年の日本英文学会第八三回全国大会シンポジア第九部門「精読の射程——アメリカ文学名作短編再発見」でも質疑応答で指摘された。
- (5) 本研究会では英訳 *Desire in Language: A Semiotic Approach to Literature and Art* を用いた。
- (6) アメリカの英文科内における文学研究と創作科の緊張関係については吉田「情の技法のもつれ——アメリカの創作科と文学批評」参照。

引用文献

- Brooks, Cleanth, and Robert Penn Warren. *Understanding Fiction*. Third Edition, Prentice Hall, 1975.
- D'Arcy, Michael, and Mathias Nilges, editors. *The Contemporaneity of Modernism: Literature, Media, Culture*. Routledge, 2015.
- Douglas, Ann. "Periodizing the American Century: Modernism, Postmodernism, and Postcolonialism in the Cold War Context." *Modernism/modernity*, vol. 5, no. 3, 1998, pp. 71-98.
- Gallop, Jane. "The Ethics of Close Reading: Close Encounters." *Journal of Curriculum Theorizing*, vol. 16, no. 3, Fall 2000, pp. 7-17.
- . "The Historicization of Literary Studies and the Fate of Close Reading." *Profession*, 2007, pp. 181-86.
- Hayot, Eric, and Rebecca L. Walkowitz, editors. *A New Vocabulary of Global Modernism*. Columbia UP, 2016.
- James, David. *Modernist Futures: Innovation and Inheritance in the Contemporary Novel*. Cambridge UP, 2012.
- Keiser, Ernest. "A Critical Look at Ellison's Fiction & at Social & Literary Criticism by and about the Author." *Black World*, Dec. 1970, pp. 53-59, 81-97.
- Kristeva, Julia. *Desire in Language: A Semiotic Approach to Literature and Art*. Translated by Thomas Gora, Alice Jardine, and Leon S. Roudiez, Columbia UP, 1980.
- Leonticchia, Frank, and Andrew Dubois, editors. *Close Reading: The Reader*. Duke UP, 2003.
- Mao, Douglas, and Rebecca L. Walkowitz. "The New Modernist Studies." *PMLA*, 2008, pp. 737-48.
- McGurl, Mark. *The Program Era: Postwar Fiction and the Rise of Creative Writing*. Harvard UP, 2009.
- Moglen, Seth. *Mourning Modernity: Literary Modernism and the Injuries of American Capitalism*. Stanford UP, 2007.
- Moretti, Franco. *Distant Reading*. Verso, 2013.
- Nair, Rukmini Bhaya. "Thinking Out of the Story Box: Creative Writing and Narrative Culture in South Asia." *TEXT*, Special Issue: Creative Writing in the Asia-Pacific Region, April 2011. www.textjournal.com.au/speciss/issue10/Nair.pdf.

- Parson, John H. *The Prefaces of Henry James: Framing the Modern Reader*. Pennsylvania State UP, 1997.
- Showalter, Elaine. *Teaching Literature*. Wiley, John & Sons, 2002.
- Walkowitz, Rebecca L. *Cosmopolitan Style: Modernism Beyond the Nation*. Columbia UP, 2006.
- 新井紀子 『A I vs. 教科書が読めない子どもたち』(東洋経済新報社、二〇一八年)
- 越智博美 「新批評、冷戦リベラリズム、南部文学と精読の誕生——トランスパシフィックな国語教育と川端康成」(『文学研究のマニフェスト——ポスト理論・歴史主義の英米文学批評入門』(研究社、二〇一二年)
- 『モダニズムの南部的瞬間——アメリカ南部詩人と冷戦』(研究社、二〇一二年)
- 金志英 『日本文学の〈戦後〉と変奏される〈アメリカ〉——占領から文化冷戦の時代へ』(ミネルヴァ書房、二〇一九年)
- 諏訪部浩一 『『マルタの鷹』講義』(研究社、二〇一二年)
- 異孝之 「今、日本で、アメリカ文学にどう取り組むか?——学問と批評のインターフェイス」『教室の英文学』(研究社、二〇一七年)
- 日本文学学会(関東支部) 編 『教室の英文学』(研究社、二〇一七年)
- 日本文学学会第八三回全国大会シンポジア第九部門「精読の射程——アメリカ文学名作短編再発見」司会・コメンテーター・舌津智之、講師・若林麻希子、國重純二、樋渡真理子、若島正(二〇一一年)
- 吉田恭子 「情の技法のもつれ——アメリカの創作科と文学批評」『情の技法』(慶應義塾大学出版会、二〇〇六年)